

# 封建地代の形態転化とその合法性

阿部 矢 二

まえがき

封建地代の典型である労働地代の生産物地代への形態転化を、社会の運動法則に準拠して理解しようとするのが、この小論の主旨である。

それゆえ、はじめに私の論旨を展開するのに必要な限度で、マルクスによって定式化された唯物史観——マルクス著「経済学批判」参照——の結論にふれることにした。

「物質的生産諸力の一定の発展段階には一定の生産諸関係が照応する」というのが、唯物史観の根本命題である。物質的生産諸力は、生産⇨労働が人間生活の基本的必要にもとづくものであるという理由からして、人間生活とともに不断に運動せざるをえない。だから、生産諸力の実在のかたちは運動である。

このような発展してやむことのない生産諸力にたいして、やがて旧くなりおかれてゆく生産諸関係は、次ぎ次ぎ、新しいより、高級な生産諸関係に生れかわり、発展する生産諸力に照応してゆかねばならない。また、生産力の主体は人間——働らくもの——であるから、生産力は、人間を自由に解放し、人間が人間たるにふさわしくな

のための、人間性完成のための諸条件をつくりだすことなくしては、発展しえない。なお、生産力が伸びるためには、直接には、生産・労働の過程そのものが、生産・労働についての働らくものの創造性を刺戟し、人格を鍛えあげ、人間として生きるよろこびと誇りを感じさせるようなものでなければならぬ。<sup>(註)</sup>

これらの点から考えると、生産力の発展の各段階にたいして照応せざるをえないところの生産関係は、究極において、疎外された働らくものの人間性のかいふくを助長する性格をもつものへ必然に変改されてゆくほかないものだとことがわかる。そういう意味で人間の歴史はあかるいのである。

封建社会における生産諸力は、その発展の各段階で直接の生産者のもつ自由の範囲を逐次拡らげていった。それは地主の搾取のしかたの変化、地代形態の変化となって現れた。封建地代の労働地代から生産物地代への形態転化は、隷属農民・農奴には、地主による直接的強制の幾分か緩和、身分的隷属のまま許された自由——非自由——として受取られた。直接の生産者が生産力を伸ばしながら獲得した自由は、始めはほとんど自由の名に値しないような、ささいな自由であつたにしても、それは彼の生産力の発展とともに成長してゆく必然性を内包する自由である。この自由は、働らくものに、その子孫に、完全な自由——あらゆる強制からの解放——を約束するところの端緒的自由として輝やく。

直接の強制労働——賦役——から解放された農奴に、どれほどの自由があつただろうか。だが、彼らはこの自由を最初の手がかりとして、人間としての自覚をつよめてゆき、やがて自身を地主と平等の人格にまで高かめた。物質的生産諸力の発展がもつ眞の文化的意義はここにある。

(註) 資本主義社会における労働・生産過程がどんなに労働者の労働、生産にたいする自発性と創意とを圧殺するものである

か。それについては、マルクス・エンゲルス選集・補巻4のうち「疎外された労働」二九六頁以下にくわしい。労働者は、労働、労働の生産物から疎外される。例えば次のようである。

「もしも、労働の生産物が外在化であるならば、生産そのものは活動的な外在化、活動の外在化、外在化の活動でなければならぬ。労働対象の疎外においては、ただ労働活動そのものにおける疎外、外在化が要約されているにすぎない。」（同書三〇三頁）

## 一 労働地代

労働地代は、封建地主が農奴を強制して義務労働に服させることによって搾取したところの農奴の労働そのものである。

「労働地代のばあいには、直接的生産者が週の一部分では、事実上または法律的に彼に属する労働用具（犁、家畜など）をもって、事実的に彼に属する土地を耕し、週の残りの日を地主の領地で地主のために無償で労働する……」<sup>(1)</sup>

直接的生産者・農奴は農耕とそれに結びついた農村Ⅱ家庭的工業を自立して営むに必要な一切の生産手段を占有している。だから、彼は生活してゆくについては、彼以外のだれにもたよる必要はない、こうした独立の生産者から彼の剰余労働を搾取するには経済的関係を通じては不可能なので、地主は経済外的強制、権力関係を以て「強奪」するほかない。よって、封建地主の名目的土地所有権は、領民にたいする支配権でもあった。

「直接的労働者が自分自身の生活維持手段の生産のために必要な生産手段および労働条件の『占有者』た

封建地代の形態転化とその合法則性（阿部）

るにとどまるような凡ゆる形態においては、所有関係は同時に直接的な支配<sup>(2)</sup>および隷属関係としてあらわれざるをえず、したがって、直接的生産者は非自由者としてあらわれざるをえない<sup>(2)</sup>。」

他人の労働を搾取するための一般的条件は、働らくものの「隷属」だが、労働地代の搾取の場合のような、地主の鞭による脅迫に屈する農奴の隷属は、きわめて単純で粗野なかちをとるのだが、そのことは、まさに当時の社会的生産諸力の未発展な、ごく低い水準と労働様式そのものの粗雑性に照応するのである。レーニンはいっている、このような農奴の隷属・搾取を土台とする経済制度——賦役経済——の「条件でもあり結果でもあったものは、技術のきわめて低い停滞的な状態であった。というのは、困難によってうちひしがれ、人格的隷属と知的暗愚とによって卑屈にされていた小農民の手で、経営が行われていたからである。」<sup>(3)</sup>と。

労働地代搾取の上に立つ賦役経済にとっての必要な前提条件の一つは、農奴に土地が分与されていることである。——分与地<sup>(1)</sup>||保有地——この保有地は地主に働き手を保証するために必要なものであり、農奴は土地と不可分に結びつけられた土地の附屬物とみなされ、かつそう扱われた。——農奴付きで土地が譲渡された——それでは「法律上は保有地が農奴を保有するので農奴が保有地を保有するのではなかった。」といわれるほど、農奴の土地・地主にたいする隷属の度合いは徹底したものであった。このような隷属状態において、地主にとっての働き手・農奴を維持するために、彼を最低生活水準で生かしておくために、保有地は地主にとって必要だった。保有地における農奴の労働は、いわゆる「必要労働」であり、保有地は「いわば現物の賃金」にあたるものであった。総じて、農奴は地主に直接人身的に隷属し、強制労働に服した非自由な労働者ではあったが、彼の労働は、地主の土地における労働と保有地における労働とによって、いくぶんの質的差異を示すようにならざるをえなかつ

た。

すなわち、地主の土地での労働は地主に剰余生産物を与えるための強制された剰余労働・賦役である。この部分の労働は、それゆえ、直接的生産者・農奴にとっては全くの犠牲であり、彼はいやいや、やむをえないで働らかされている。したがって地主側の強制がゆるめば、農奴は労働の緊張度をゆるめるといふ傾はあっても、自発的に労働を強化したり、あるいは労働の結果について関心をもつようなことはありえない。

要するに、働らくものに労働にたいする積極性をもたせることのできない強制労働の生産性は、ごく低い程度のものであり、かつ、その低い程度に停滞し、固定するのが当然である。賦役による地主経営に発展的契機が乏しかったことは、賦役・労働地代の搾取が、時の流れにつれてほかの搾取形態に移り変わる根本原因であった。

地主経営における農奴の労働の生産力が伸びなやみ、固定的であったのにたいして、保有地における農奴の労働の生産力は、次第に発展しうる条件をあたえられていた。

保有地は地主に働き手を保証するために必要だったといわれるように、保有地は農奴の労働力を再生産するために必要不可欠の労働条件であり、農奴はその保有地における労働——必要労働——によって、自分の生活資料——現物の賃銀——を自給していた。保有地における農奴の経営は、彼がその責任において計画し、実行することを許されたところの、いわば自由な——といっても一般的な身分による隷属からの自由ではないが——自主的な経営であった。したがって、この経営での労働は、地主の直接の強制から免かれたという点では、自由な労働であった。農奴の自家経営で許されたこの自由な労働、自身のために生活手段を稼いだす自由な労働は、その労働の結果が自分の取得になるといふ点で、そしてこの部分の取得が少しでも増加すれば、それによっていくらか

生活を豊かにさせようという期待と可能性をもたせる労働だという点で、農奴に労働とその結果にたいする直接の関心、労働の生産性を高めようとする労働にたいする積極性をおこさせるにいたることは確かだ。

このような事情によって、封建社会の生産諸力は、保有地における農奴の自家経営の内部で、彼に許された自由、由に促されて、徐々に発展した。

「週に二日というこの賦役労働はかくして固定されており、慣習法または成文法によって法律的に規制された不変量である。だが、直接的生産者自身が自由にする残りの週日の生産量は可変量であつて、彼の経験が進めば発展するに相違ないことは、あたかも、彼のおぼえた新しい欲望が、また彼の生産物のための市場の拡大や、彼が自分の労働力のこの部分を自由にしうる保証の増大が、彼を刺戟して自分の労働力の緊張度を高めさせるであろうことと同じであるが……」<sup>(5)</sup>

賦役制度のもとで、農奴の労働の二つの部分——剰余労働と必要労働——の生産性の差異は、当時の労働生産力発展の低段階にあつては、極めて徐々にひらいていったであろうが、やがて、それは一般に認められるほど顕著になった。そうなつたら、賦役による地主経営は保有地の農奴経営に、必然に、その席をゆずらざるをえなくなる。賦役、なまの労働そのままの搾取ではなくて、労働の果実・生産物の搾取が次にあらわれる。労働地代の生産物地代への進展である。

## 二 生産物地代

地主にたいする農奴の人身的隷属、身体をもつてする直接の奉仕、これが労働地代の段階での地主と農奴の関

係だったが、このしかの人身関係が生産物地代の段階では、物——生産物——を間にはさんで間接的なものとなる。身体——労働——を捧げる義務が、労働の生産物を貢納するだけの義務にかわる。このような地主と農奴との関係の変化が労働地代から生産物地代への、地代形態の変化となって現象する。地代形態のこの変化は、直接には労働生産力の向上増加によってひきおこされ、生産性向上の利益を地主が横奪するための搾取のしかたの變化に過ぎない。

しかしながら「不払の剰余労働が直接的生産者から汲みだされる独自のな経済的形態は、支配——および隷属関係を規定する……」<sup>(6)</sup>といわれるとおり、右のような搾取のしかたの變化は、封建社会の中心的秩序——世襲身分制に固定化された直接の人身的支配隷属を規定する秩序——にたいしその変改を要求する性格をもつものである。労働地代の生産物地代への転形の段階は、地主制の發展ないし安定期であり、地主の政治経済的勢力が拡大強化される他面、農奴の賦役からの解放が行われた。これは、すなわち、生産力發展の一定段階までは、生産関係がそれに照応しうる弾力性——生産関係が生産力の發展をたすけるように自体を修正できる弾力性——をもつ、ということの事例である。

生産物地代は、経済学的にいえば、先行の地代——労働地代——と地代の本質を異にするものではなく、いずれも「剰余価値または剰余生産物の唯一の支配的で正常的な形態」である。<sup>(7)</sup>しかしながら、生産物地代はそれに先行する労働地代から区別される諸点を、勿論、もっているものであり、それをマルクスは次のようにあげている。

「剰余労働はもはやその現物姿態では行われず、したがってまた、もはや地主またはその代表者の監視や強制のもとでは行われないのであって、むしろ直接的生産者は、直接的強制の代りに諸関係の力により、鞭

の代りに法律的规定によつて驅りたてられ、自分自身の責任のもとで剰余労働をしなければならぬ……」<sup>(8)</sup>

直接の生産者は、この段階でも政治的・社会的生活の面では、無権利のままであり、地主階級に隷屬する隷農階級であつた。だが、彼らは今や、生産過程では地主の直接の強制からは自由にされ、「自分自身の責任のもとで剰余労働」をすることができるようになつた。すなわち、農民は隷農の身分ながらも、自分の経営についても、自分の貢納義務についても、自ら責任をとるところの、いわば、独立の経営者としての地位を認められるにいたつたのである。この自己責任による経営においては、直接の生産者は同時に独立の経営者として、労働についてだけでなく、私的・社会的經濟關係全般についても積極的に関心をもたざるをえなくなる。近代の企業家的精神の芽が、自然そこから萌えだす。

なお同時に「直接的生産者は自分の全労働時間を多かれ少かれ自由に処分する」<sup>(9)</sup>ことになるので、労働を緊張強化することによつて、剰余労働時間を短縮し、必要労働時間——この部分の労働の生産物は農民の生活資料となる——を相対的に延長することが可能になる。

「生産者にとっては、むしろ、労働地代にくらべれば、自分の最も不可欠な欲望を充たす自分の労働の生産物と同じように自分自身に屬する生産物を生産する超過労働のための時間を得るための、より大きな余裕が与えられている」<sup>(10)</sup>

このようにして、直接の生産者はより多量の生活資料を獲て、その生活程度を高めることができようが、なお不可欠な欲望を充たしたうえに、いくぶんの余剰をもつこともありうるようになる。——余剰というのは、総生産物のうちから生産物地代と生活資料を差引いて、なお余る部分・企業家の取得する利潤にあたる。

農耕とそれに結びつく農村的家内工業の経営が個別的に自由に行われるようになると、経営者の資質・能力などの相違にいろいろな自然条件のちがいや偶然が加わって、経営の優劣、したがって農民のあいだの貧富の差が發生し、拡大することになる。生産物地代の段階では、経済の進むにつれて自然に「直接的生産者がみずから再び他人の労働を直接的に搾取する手段を獲得したという可能性」が定在するのである。<sup>(1)</sup>だから生産物地代の搾取を土台としてその上にたった封建社会のうちに新しい階層の分化——富農と貧農層——が、必然におこってくる。農民階級のうちのこの分化は、やがて富農は地主・ブルジョアジーへ貧農は雇農・プロレタリアートへと一層の進展をとげるべき運命をもつものであるが、このことは、とりもなおさずその伸展の過程で封建社会の生産諸関係を徐々に変改しながら、同時に新しいより高度な社会を生みだすための物質的条件を、封建社会の胎内でつくるといふことを実証する。

社会的生産諸力の発展の直接の結果は、生産物の増加である。地主階級は生産物地代として最も多量の農工生産物を取り上げるのだから、それらの貢納物の一部分を商品化せざるをえない。経営を成功的に行い富農層へ上昇する農民もまた、余剰の生産物売りだすようになる。以前は自家消費にあてていたところの単なる労働の生産物は、いまや、売られだされて商品となるにいたれば、生産もまた商品生産に変質する。隷農が生産物地代を地主に搾取されながら商品生産を行うことができるようになったということは、生産物地代が剰余価値の「唯一」の「正常的な」形態でなくなった事実を示す。封建社会では、利潤は生産物地代を規定するまでにはいたりえないが、そこで商品生産がかなり一般的に行われたということは、利潤が「生産物地代の背後」で相当の程度に成長していたことを物語る。自給自足を目的とした生産が商品生産の方向に転化していく傾向、それにつれて隷農

が小経営者として利潤に似たものを取得しつつ富裕化していく傾向——階層分化の傾向——はいずれも、社会的生産諸力の発展の結果だが、これらの結果は生産諸力の一層の発展をさそいだす原因となる。原因結果のこのような発展の相互関係をつくりだしつつ社会的生産諸力は成長して行く。

以上を総括すると次のようである。

労働地代の生産物地代への転化は、農奴の保有地での必要労働部分の労働の生産性の高かりにより促されておこった。この転化のもつ進歩的意義は、身体に加える直接的強制による搾取を「事情の力」による搾取にかえることにより、隷農に自己責任による農業経営を許したというところにある。

すでに伸びつつあった生産力は、直接の生産者にたいする地主の強制が緩和されるにおよんで一層の発展をとり、自然経済のうちに商品生産を、隷農のうちに階層分化をひきおこした。社会的生産諸力の発展にもなつて徐々に起こったこれらの諸変化は、ついには封建社会を改革する矛盾に転化する、そうした窮極的な結果を思うと、地代形態の労働地代から生産物地代への転化は、社会的生産の未発展のうちで、蒙昧暗愚のまま粗暴に虐げられた隷属農民のいたましい姿を透して、やがてあらゆる隷属から自己を解放してゆく逞ましい希望にもえた働らくものの未来の人間像を、人びとに描かしめる一つの契機をあたえるものとして高く評価すべきものである。マルクスは、生産物地代が内蔵する文化的意義を指摘している。

「生産物地代は、直接的生産者のより高い文化状態を、つまり、彼の労働・および社会一般のより高い発展段階を内蔵する。<sup>(12)</sup>」

生産力はその発展の特定段階に達すると旧くなりおくれた生産関係を突破する——人類の進歩は働くものの汗

で購われる。——一九五九年四月記す。

(註)

- (1) 長谷部文雄訳「資本論」第三部、一一二頁。
- (2) 同 一一三頁。
- (3) 大月書店版・レーニン全集・第三卷上「ロシアにおける資本主義の発展」一八二頁。
- (4) 岩波新書版・レオ・ヒューバーマン著「資本主義の歩み」(上) 一一頁。
- (5) 前出・資本論 一一一八頁。
- (6) 同 一一一五頁。
- (7) 同 一一一九頁。
- (8) 同 一一二〇頁。
- (9) 同 一一二〇頁。
- (10) 同 一一二二頁。
- (11) 同 一一二二頁。
- (12) 同 一一二〇頁。